女子寮誘惑ハーレム

さくらんぼ荘へようこそ!

大泉りか
挿絵／サブロー

立ち読み版

KILL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

第一章　女だらけのアパートに男ひとり!? …… 4
第二章　産地直送巨乳娘と新婚気分で……。 …… 91
第三章　金髪令嬢にご奉仕シックスナイン …… 126
第四章　わたしたち三人、身体でおもてなしします！ …… 190
第五章　バージン女子大生とラブラブ初エッチ！ …… 247
エピローグ …… 282

登場人物 *Characters*

藤崎 凛
(ふじさき りん)

地元の国立大学に通う美少女。アルバイトでモデルをしており、気が強いが他人を思い遣れるしっかり者の女の子。

優木 はるか
(ゆうき はるか)

椿山女学園保育学科所属の四年生。福島出身の天真爛漫な巨乳少女。

澤宮 ユマ
(さわみや ゆま)

椿山女学園二年生で北欧からの国費留学生。やんごとなき家の出身で雅也をあれこれこき使う。

宗方 秀香
(むねかた ひでか)

雅也の従姉妹で二十八歳のOL。大学を卒業した後も寮に居座り続けているあけっぴろげな性格のお姉さま。

宗方 雅也
(むねかた まさや)

十九歳の浪人生。母の急な引っ越しにより、さくらんぼ荘の管理人を務めることになる。

乳首らしいと見当をつけて中指の腹でくいくいと擦りあげると、はるかは雅也のペニスを口に咥えたまま「んんっ」と悩ましい唸り声をあげる。
肌の温度があがり、濡れ髪からのシャンプーの匂いが一層強く漂った。
下を向いてペニスを咥え込んでいるため表情は窺えないが、かすかに身体を震わせているのは、快感に耐えているように見える。
(優しくゆっくりたっぷり時間をかけて焦らす、だよな)
本当はすぐにでもエプロンをひん剥いて、女子大生の特大おっぱいをナマで拝みたい気持ちだが、そこをなんとかぐっと堪えて中指で乳首をくいくいと掻きあげる。
最初はわずかの段差ほどしか感じられなかった乳首が、だんだんと体積を増やしてきた。それに応じて硬さも増して、強張っていく。
「ああん、ダメ。はるか、乳首は弱いんだから」
女子大生は、むっちりとした身体を悩ましげにくねらせながらも、舌を休めることなくペニスを舐めしゃぶっている。しかし、その舐め方に、さっきまでの余裕は見られない。雅也に胸を触られたことでスイッチが入ってしまったように、奥まで咥え込んでは、貪るように激しく頭を上下させ始めた。
(まずい、まずい、これじゃあ、すぐにイっちゃうよ……イク前に、はるかちゃんの

ナマのおっぱいが見たい！）

秀香に散々言われたけれど、たっぷり時間をかけて焦らす余裕はありそうにない。

少し性急かとも思われたが、はるかの背中に手をまわすと、ワンピースのファスナーを下ろし、エプロンの肩紐をずらした。するとぽろりと豊かなノーブラのおっぱいがまろびでた。

（う、うわぁ、これがはるかちゃんのおっぱい！　想像以上にデカいッ！）

服の上から見ても相当豊満だったが、それでも幾ばくかは服地で押さえつけられていたようで、すべての障害を取り去ったバストは、まるですいかのような規格外の大きさだった。

台所の天井に備えつけられた蛍光灯で照らされた膨らみは、まるでつきたてのお餅のように真っ白で滑らか。まんまるの膨らみは中心部に近づくに従い、ほんのりと淡いピンクに色づいている。そのさらに円芯にはぽちりと尖った膨らみがあるが、乳房や乳輪と比べると慎ましいほどに小さく、綿棒の先ほどしかない。

「あんっ、もうっ！　こんなところで脱がせちゃダメだよぉ」

はるかが両腕を胸に当てて掻き抱いたが、到底女の子の細腕で隠せるサイズではない。バストトップこそ、かろうじて隠れたものの、綺麗な半円を描いた下乳がぷるん

ぷるんと覗いている。
「だって……エプロンの上からだけじゃ、我慢できなくって。はるかちゃんのおっぱいがどうしても見たかったから……」
思い切って素直に言うと、
「もーっ、雅也くんのエッチぃ」
とはるかは小鳥のように唇を尖らせた。しかし、本気で嫌がっている素振りはない。
(そうだよな、頼まれると断れないって言ってたし……)
雅也は勇気を出すことにした。
「そうだよ、エッチですよ。だから、もっとよく見せてよ。はるかちゃんのおっぱい」
「もう。仕方ないなぁ。そんなふうに挑発したら、はるかもエッチな気分になっちゃうじゃん」
断れないのは自己申告通り本当らしく、照れくさそうな笑みを浮かべながらも、両手を脇へと退かして、双胸の突き出しを見せてくれた。
「うわぁ……こんな大きいおっぱい、見たの初めてです」
「へぇ、じゃあ、もっと小さいおっぱいは見たコトあるんだぁ。雅也くんってウブそうに見えて意外と進んでるんだね」

しまった。墓穴を掘ってしまったかと慌てて首を横に振って否定する。
「いや、誰かと比べたとかそういうんじゃなくって！」
「嘘ぉ」
「嘘じゃないですよ」
「ふーん、じゃあ、こういうのはどうかなぁ」
女子大生は悪戯っぽい笑みを浮かべると、横乳を脇から、手のひらで掬い上げた。
むっちりとした乳肉が中央にぐっと押し寄せられ、ただでさえ深い谷間がさらに強調される。
「ねぇ、ここの真ん中にちんちんを挟んだことってある？」
「そんなこと……もちろんないですよ！」
「はるかもっ。でもしてみたくない？」
「ええっ」
ごくりと喉が鳴った。
胸といえば、神聖な女性のシンボルだ。触ったり吸ったりするならともかく、そこにおちんちんを挟むだなんて。しかし、今にも蕩ける寸前のクリームみたいな乳肉が、むっちりむっちりと寄った間の隙間はいかにも柔らかそうで、抗いがたい魅力を放っ

ている。
「ねぇ、どうかなぁ？　ここにおちんちん挟むの、興味ないわけは……ないよね？」
胸を曝け出したことで、すっかり開放的な気分になったのか、もともとおおらかな性質（たち）の田舎娘は、悪戯っぽい目つきで、雅也を誘惑してくる。
（興味がないわけはないけど……そんなことまで頼んじゃっていいの⁉）
せめぎあう理性。何よりも先に陥落したのはペニスだった。目の前に差し出された谷間の前で、正直にもこくこくと頷くように上下に揺れてしまっている。その前で、誘うようにふるふると揺れる軟乳に理性がぶっ飛んだ。
「は、挟んでください！」
亀頭をピクピクさせて懇願する雅也のペニスを、童顔の女子大生は小悪魔的な笑みを浮かべながら、双乳の間へそっと挟み込んだ。ふわふわの柔肉がペニスをしっとりと包み込む。
（う、うわぁ！　おっぱいの真ん中からおちんちんが突き立っちゃってるよ！）
見事としかいいようのない豊かな乳房の触感はまるでマシュマロのようだった。触り心地の滑らかさや柔らかさはもちろん、真っ白な肌の色もそっくりだ。違うのは温度で、雅也の熱く滾りきったペニスよりもほっこりと温かく、しっとりと汗ばんだ谷

間からはミルクに似たかすかに甘いフェロモン臭が立ち上っている。
清らかな新雪のようなはるかの乳肌とは対照的に、ぬめりと光沢している真っ赤なペニスはグロテスクとしかいいようがない。そのペニスの先から、透明な汁がこぷこぷと漏れ出て、はるかの肌を汚してしまっている。
「あん、やだぁ、雅也くんったらまだ動かしてもないのに、濡らしちゃってる」
「だって、はるかちゃんのおっぱいがすごすぎて」
「うふふ。どうすごい？」
「ふわふわで、温かくって、柔らかくって、ちんちんが溶けちゃいそうだ！」
「うふふ、雅也くんって素直で可愛らしいねぇ。そういうふうにいわれると、もっと気持ちよくしてあげたくなっちゃうなぁ」
はるかは脇から双乳に当てた手のひらを、ぐいぐいと中央に向かって寄せた。たぷりたぷりと乳果が波打ち、両脇からペニスに優しく押しつけられる。
「ああっ、おっぱいの肉がちんちんをぐいぐい押してる……こんな感触、初めてだ」
「そっか、じゃあ、せっかくだから、はるかのお口とおっぱいでイカせてあげるね」
はるかは上目遣いに雅也を見上げたまま、ゆっくりと唇を開くと、たらりと唾を垂らした。ぽってりとした愛らしい唇から、とろりとした粘液が亀頭へと垂れ落ちる。

（ああっ、おっぱいで、擦られちゃってる……）

亀頭全体がてらてらと光るほどに唾を垂らし終えると、はるかは乳房に押し当てた手を上下に動かしはじめた。たっぷんたっぷんと肉の撓(たわ)む音と、ぴしゃりぴしゃりと下乳が膝に打ちつけられる打音、さらに胸間からはぬちゃぬちゃとした水音が響く。

淫猥なのはその音だけではない。ひしゃげては、元の美しいお椀形へと自由自在に変化する膨らみに思わず目を奪われてしまう。

単純な刺激の強さだけで言えば、手の細やかな動きには敵うわけはないし、アソコの包み込むような快感にも及ばないが、しかし、ビジュアルのインパクトで言えば、一番かもしれない。それに、むしろ、達したいのに、なかなか達しないもどかしさが、雅也の劣情を一層掻き立ててもいる。

「ああっ、はるかちゃん……」

はるかは顔をあげると、にこりと微笑んだまま、谷間からにょきりと生えるように突き出した亀頭にぷちゅりと唇をつけた。とたんに強烈な快感が脳髄に奔る。

「んーっ、雅也くんのちんちん、お口の中で熱(あ)っつーい」

はるかは、亀頭を唇から一旦離すと、またすぐにじゅぷりと奥へと吸い込んだ。にゅるんとした唇の感触に、背筋がびびびと電流が流れたように痺れ、口奥の温もりに、

腰奥がムズムズと震えてしまう。
おまけに陰茎は、その付け根からカリ首の根元まで、しっとりと濡れた乳肉で、サンドされているのだからたまらない。
「あうっ……ああ、あうっうう」
言葉にならない呻き声が漏れてしまう。
ペニスをしっかりと包み込んだ乳房が動く度に亀頭の表皮が優しく擦られる。
はるかの体温があがり、ペニスを包む肌が一層熱くなって、白い谷間には玉のような汗が浮かびはじめた。甘酸っぱい匂いが辺りに立ち込め、その濃厚な牝臭に、ペニスが呼応するようにびくびくと蠢く。
（ああっ、もうダメだ。我慢できないっ）
はるかが唇の吸いつきを強くした。頬が凹むほどにバキュームされた亀頭に、内粘膜がぴとりとくっつく。口内では、別の生き物のように舌がレロレロと動き、先端へと誘うように裏筋を撫であげる。
「ああっ、出るうっ」
睾丸がきゅっと縮まって、熱い液体が下半身を逆流した。はるかの口内でペニスがびくりと震え熱い白濁液がどぴゅりとほとばしる。

「んぐっ、んんっ、んーっ」
「あー、ぼく、ごめん、つい我を忘れて……イってしまいました」
すべて排出し終え、我に返った雅也が慌てて頭を下げると、はるかは床にしゃがみこんだまま、エプロンの裾で唇を拭ってにこりと笑った。
「全然大丈夫だよ。はるかがしてあげたかっただけだから。またして欲しかったらいつでもいってね」
「ええっ、そんなわけには……」
「いいのいいの。はるか、本当に困ってる人を見ると放って置けない性格なんだぁ。さ、シャワーでも浴びてこようかな」
「あ、じゃあ、ぼく、床を拭いておきます」
「ありがとう、管理人さん。じゃあ、またね」
雅也にニコリと笑いかけると、はるかは鼻歌を歌いながらダイニングを後にした。
(管理人さん……かぁ。寮生とこんなことしたって、秀香さんに見つかったら……きっと、怒られちゃうよな)
濡れた床を見つめながら、雅也ははぁあとため息をついた。

まだ凛のことを気持ちよくできていない。こんな状態でひとりだけイクなんてことはできない。なんとか射精を耐えるには。そうだ……これしかない。

「凛ちゃん、好きだ！」

雅也は凛を強く抱きしめると、そのまま床へと押し倒した。

「いきなりどうしたの？　雅也くん、ぎゅってしてくれるのは嬉しいけど……」

「触られるのも、舐められるのも嬉しいけど、でも、凛ちゃんともっと密着したいんだ。だから、凛ちゃん、ぼくの身体に逆向きに跨ってよ」

「ええっ、やだよ、そんな恥ずかしい格好」

「だって、凛ちゃんと離れたくないんだもん」

「……もうっ、あんまりじっくり見ちゃダメだからね」

凛は真っ赤に顔を染めたまま、雅也の顔のほうへとお尻を向けて跨った。

これならば腹部や胸部が全部密着しているし、舐めてもらうこともできるし、凛さえ許してくれるなら、舐めることだってできる。

「凛ちゃんのも舐めさせてよ！」

「きゃあっ、それはダメだよぉ」

目の前のぷくっとなだらかな恥丘を包み込んでいるショーツの腰の辺りの紐を解く

と、簡単に解けてしまった。凛が驚きの悲鳴をあげる。
「だって、ぼくだって凛ちゃんが気持ちよくなっているところが見たいんだ」
「んぁっ、だって、わたし、初めてだし、そんなことまでは無理だよう……」
凛がイヤイヤするように長い黒髪を左右に振り乱すが、雅也は構うことなく手を伸ばすと穢れを知らない裂け目を両手で掻き分ける。
「うわぁ、凛ちゃんのココ、すごく綺麗だ……」
お世辞ではなく本当だった。こんもりと膨らんだ肉畝には艶やかな陰毛がふんわりとこもっている。その内側のラヴィアは鮮やかな薔薇色。指で掻き分けるように広げると、その内膜はすぐにでも雅也を受け入れられるほどに潤っている。ぷっくりと可愛らしく色づいたクリトリスはピンとその存在を主張するように屹立し、触って欲しいとばかりにぴくぴくと震えている。
「んっ、雅也くんのは……なんだかすごく、いやらしい形」
いとおしい異性の性器に見入っていたのは雅也だけではなかった。凛もまた、息を呑んで雅也の性器に見惚れていたらしく、ぼそりとため息混じりの声が聞こえた。
「凛ちゃん、舐め合いっこしよう」
雅也が凛のまだ何も知らない裂け目に舌を這わせると、凛はぴくりと身体を震わせ

た。
「は、はやひゃぁああっ。ダ、ダメだよ、雅也くん、そこ、そんなふうに舐められたら、舐められないよ」
「なんで？」
「なんでって、気持ちよすぎて……やだぁ、わたし、初めてなのに、気持ちよくなっちゃってる」
「でも、ぼくも凛ちゃんのここ、舐めたいよ。それで、もっともっと気持ちよくなって欲しいんだ」
雅也が舌を尖らせて凛のまだ幼さの残る割れ目に差し込むと、蕩ける蜜がぐちゅりと口の中に流れ込んできて、口の中が凛の味でいっぱいになる。それどころか雅也の顔にぽとぽとと垂れ落ちてくる始末。
さすがにペニスを頬張る余裕はないらしいが、それでも、一生懸命に舌を伸ばしてペニスを舐めあげてくれるのがいじらしい。ぬるぬるの舌にレロレロとなぶられ、亀頭がぶるぶると震えてしまう。胸もお腹も太ももぴっちりと密着して汗がぬるぬると混じり合っていく。
「あっ、なんか……なにこれ、なんだかもうちょっとで……」

凛の形のいいヒップがもどかしげにくねくねとした。
（もうちょっとって……もしかしてイキそうってこと？）
処女の凛をまさかイかせることなどできるわけがないと思っていたので、まるで予想外のご褒美を貰ったかのように雅也の心中は悦びで満たされる。
（よし、絶対にイかしてやるぞ！）
雅也は凛の性器にべっとりと吸いつくと、ちゅうちゅうとクリトリスを中心に吸い上げる。本当は中に指を入れたいのだが、そこはまだ未通の秘孔。一番乗りはペニスに譲ってやりたい。
雅也に吸引され、クリトリスがますます膨らんできたのが口の中でわかった。割れ目から溢れる愛液も、さっきまでのさらさらとしたものに比べ、どろりと粘度をあげてきたようにも思える。
雅也の口淫が熱を帯びるに従い、凛のほうは口を使うのが、逆におぼつかなくなってきた。健気に陰茎に舌を絡めていたものの、次第に余裕をなくして、そのうち、荒い息が吹きかかるばかりになってしまった。
「あ、あ、あ、雅也くん……イク、イっちゃうううぅ」
凛がぎゅうと雅也の太ももに抱きついた。同時にクリトリスがびくんと慄いて会陰

全体がぶるるぶるると痙攣をくりかえす。
「あ、あああッ……あぁ……」
ぐったりと雅也の太ももに倒れこんだまま、時折ブルブルと身体を痙攣させていた凛が身体を起こしたのはたっぷり三分ほど経ってからのことだった。
「イっちゃったね」
髪を撫でる雅也に、はにかんで照れくさそうな微笑を浮かべる。
「初めてのエッチなのに……」
「いや、まだエッチはこれからだよ」
「あっ、そうか」
しまったという顔をする凛にのしかかると、ぎゅっと抱きしめて耳元で囁く。
「イっちゃったばかりだけど、大丈夫？」
「うん……。だけど、雅也くん。ひとつだけお願い聞いてもらってもいい？」
「いいけど、何？」
「あのね、わたし、できたら上でしたい」
「上⁉」
処女の女子大生の突拍子もない申し出に驚きの声をあげると、凛は申し訳なさそう

に身を縮こまらせて言った。
「あのね、喪失って痛いんでしょ？　わたし、下だときっと逃げちゃうと思うの。けど、上だったら逃げようがないし、それに、雅也くんの顔もちゃんと見ながらできるかなって思って……わたし、ヘンかな？」
「ヘンじゃない、全然ヘンじゃないよ。凛ちゃんの気持ちが一番楽な体勢でするのが一番だから、その通りにしよう」
立ち上がると布団に手をかけた。生まれてからこれまで何度となくくりかえした動作なのに、ドキドキと胸が鳴る。ようやく敷き終えると、上半身を起こしたまま仰向けに寝転がった。
「さ、凛ちゃん、おいで。ゆっくりぼくの上に跨って」
凛は緊張した面持ちで雅也の身体を脚で跨ぐと、布団に膝をつけて雅也のペニスの上辺りに股を置いた。
「ぼくの亀頭に、凛ちゃんの愛液をたっぷり塗して。そう、そっちのほうがきっと痛くないから」
雅也にしても、処女の女のコを抱くの初めてだ。どれほど痛いのかさっぱりわからないが、慎重にするにこしたことはない。自らのペニスを右手で支えると、凛の股間

に押し当てる。まずは中へは入れずに割れ目に滑らせるようにこすりつける。
クリトリスに亀頭がこすれる度に生じるらしい快感に、凛は、んんっと可愛らしく呻いては、雅也の腰についた手に力を込める。とめどなく凛から溢れ出すヌルヌルした蜜が、雅也のペニスを歓迎しているようでなんだか嬉しい。雅也のペニスにたっぷりと愛液が塗されたところで、凛の腰に当てた手に力を込める。
「凛ちゃん、そのまま、腰をゆっくり沈めてみて。そう、ゆっくりゆっくり。無理しなくていいから」
「んん、ん……あ、入ってきた……」
凛が腰を沈めると、雅也のペニスが凛の裂け目にゆっくりと飲まれていった。眉根をぎゅっと寄せてはいるが、そう痛がっている様子はない。
（よかった、なんとかうまくいきそう）
ほっとしたのもつかの間、ペニスの侵入を遮るような障害にぶち当たった。亀頭を跳ね返すように柔らかく弾き返してくる。
「あ、痛い……痛いかも」
どうやら処女膜にぶち当たったようだ。凛が泣きそうな声をあげる。
「無理しなくていいから、ね、凛ちゃん」

「うん、大丈夫、だって、わたしも雅也くんとつながりたいもん……んんっ」
凛は雅也の腰を掴む両手に力を込めると、唇をぎゅっと噛み締めて、ぐっと腰を下ろした。亀頭がバウンドするような抵抗を感じた後、ずるり、と一気に膣奥までペニスが埋まり込む。
「あっ、入った」
「んんんん――――っ」
凛は目をぎゅっと閉じ、顔を真っ赤にして痛みに耐えている様子。雅也にできることといえば動かないように身体をじっとさせていることだけ。
「ふううっ」
凛が大きくため息をつくと、目をぱちりと開けてはにかんだ笑みを浮かべた。
「大丈夫、凛ちゃん？」
「うん、大丈夫、もう、痛くない……っていうのは嘘だけど。でも、それよりも雅也くんとひとつになれてるのが嬉しい」
雅也が尋ねると、上半身を前に倒して雅也の唇にちゅっと口付けた。
「……凛ちゃん。ありがとう」
しみじみと感激が込み上げてくる。初めてを雅也にくれた女のコへの愛しさが胸い

っぱいに広がって歓喜が身体の隅々まで奔りぬける。
（凛ちゃんとエッチをしちゃった……凛ちゃんはぼくのものだ！）
凛もまた初体験の悦楽に浸っているようだった。
「初めての相手が雅也くんで本当によかった」
雅也の頬に両手をぺとりと当てて、可愛らしい目で覗き込んでくる。しばらくそのまま幸せの余韻に浸っていると、雅也のペニスが抗議するかのようにぴくんと脈打った。
「あれ、おちんちんがいま、ビクンって言ったね」
「ううっ、ごめん」
恥ずかしさに雅也の顔が赤くなったのがわかった。せっかくロマンチックな雰囲気だったのに！
「ううん。わたしこそ、ごめん。続き、しようか」
凛は上半身を起こすと、腰を左右にグラインドさせた。膣内の、蛇腹（じゃばら）のようなヒダヒダが雅也のペニスに絡みつき、瞬く間に甘い快感がせりあがってくる。
凛が身体を上下に動かす度に、ぬぷぬぷと温かな泥濘（でいねい）の中をペニスが往復する。未だかつて何者の侵入も許していない純潔の穴は、さすがに狭くきつく、凛の不器用な

ピストンでさえ、油断するとすぐに絶頂に達してしまいそうだ。
凛の胎内の温かさに、雅也の精液たちが早く早くとざわめきはじめた。膣内の襞も早く牡汁を注ぎ込んでくれとばかりにねっちりと絡みついて、脳髄が沸騰するような興奮が押し寄せてくる。
（ああっ、もっと腰を思いっきり振りたいけど……凛ちゃん辛いよな）
凛の様子を窺うと、唇こそぎゅっと結ばれているものの、目はとろりと蕩けそうになっている。
「ああっ、なんか、おちんちんってすごい……わたし、気持ちよくなって来ちゃったみたい。ねぇ、処女なのに、それっておかしいかな」
「おかしくない、おかしくないよ、凛ちゃん」
（それだったら、もうちょっと動かしても大丈夫……かも！）
雅也が遠慮がちに腰をつきあげると、さっきまで生硬かった膣壁が解されて、だんだんと柔らんでいくのがわかった。空いた手でブラジャーを押し上げ、両乳房を弄くると、さらに胎内が蕩けていく。
「あ……んんっ、腰が、なんだか勝手に動いちゃうよぉ」
凛はいつもの勝ち気な姿はどこへいったのか、髪を振り乱してはふんふんと甘える

ような声をあげている。その姿に雅也の中で何かがドクンと弾けた。
（も、もうダメだ！）
頭の芯がじんじんと痺れ、止めようにも腰が勝手に動いてしまう。凛の上下ピストンに合わせ、腰を下げたタイミングを狙って、ぐっと突きあがっては、ぐじゅぐじゅに濡れた淫沼を突き乱す。
「ど、どうしよう、凛ちゃん、ごめん。ぼくも勝手に腰がぁ」
「大丈夫、雅也くん。もう全然痛くない。だから、雅也くんも遠慮しないで動いて大丈夫だよ」
「遠慮なんてしてないよ、本当に腰が勝手に動いちゃうんだぁ」
「ん、あふうっ」
雅也がぐいっと腰を打ちつけると、凛が色っぽい喘ぎ声をあげた。急速に開花する女体に感激を覚えながらぬちゃぬちゃとペニスを出し入れする。
「ああ、凛ちゃんのおま○こすごい。初めてだっていうのに、ぼくのおちんちんをこんなにぱっくり飲み込んで……ほら、わかる？」
「はぅん。わかる、わかるよ。雅也くんのおちんちんが、わたしの中をぐりぐりしてるのわかるっ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

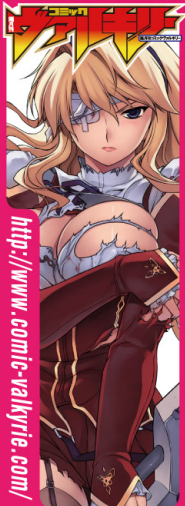
※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！



http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！